発音練習課題が、英語発話行動の積極性に及ぼす影響 I

—質問紙調査によるモデル検討—

○佐賀 ゆりえ¹・遠藤 健治²

(青山学院大学大学院¹・青山学院大学²)

キーワード：外国語不安、発音、Willingness to Communicate(WTC)

The effect of pronunciation practice on Willingness to Communicate in English :Examining the model with questionnaire method

Yurie Saga¹ and Kenji Endo²

(Aoyama Gakuin University Graduate School¹, Aoyama Gakuin University²)

Key Words: Foreign Language Anxiety, Pronunciation, Willingness to Communicate(WTC)

問題

学習指導要領の改訂が決定されたことで英語教育は大きな転換期を迎え、学習者が英語運用能力を習得できる教育環境の整備が求められている。外国語の効率的な学習方法を確立する上で重要な側面が、学習者の情意要因である。

Horwitz, Horwitz, & Cope (1986) が提唱した外国語不安には、コミュニケーションによる社会的相互作用の側面が含まれており、外国語習得や言語処理に負の影響を与えることが示されている。また、自発的にコミュニケーションを行う意思であるWTC (Willingness to Communicate) の概念も外国語習得研究に使用され、MacIntyre, Dörnyei, Clément & Noels (1998) はピラミッド型のWTCモデルを提唱した。このモデルは、教室状況での学習者の情意的要因に直接関連していることから、英語教育が目標とする過程は、WTCモデルの第4層「第二言語の使用に対する自信」から、第1層の「第二言語の使用」に該当すると考えられる。さらに外国語不安とWTCには、発音が関連すると近年報告され、発音を間違える恐れや、笑われる懸念が不安を喚起し、発音への不安が高い学習者はWTCが低いことが示されている。

学校教育において、英語での積極的なコミュニケーションが重要視されているものの、外国語不安と発音の関連や、不安を軽減させる方法の実証研究は依然として少ない。本研究では、日本人学習者が学校教育課程で経験する外国語不安のうち、発音に関連する不安と、英語発話行動に対する積極性の関連を検討した。

方法

大学生109名(女性76名, 男性33名, 平均年齢20.68歳 ($SD=1.03$)) が参加した。回答は任意であることと、回答をしないことにつき、成績上の不利益は生じないことを調査時に説明した。質問紙の構成は①フェイスシート(性別, 年齢, 留学経験の有無, 英語資格の有無) ②英語スピーキング抵抗感尺度(磯田, 2008: 9項目, 7件法) ③英語授業不安尺度(近藤・楊, 2003: 18項目, 6件法) ④調査者が作成した質問項目(16項目, 二者択一法(はい・いいえ)での回答方式)である。

結果

不備を除いた100名(女性72名, 男性28名, 平均年齢20.76歳 ($SD=1.04$)) の回答に対し主成分分析(バリマックス回転)を行い、④の質問項目の変数化を行った。変数化に際し、大学院生8名に各質問項目の英語使用の積極性について5件法で評定させ、質問項目ごとに評定値の平均点を算出し、「積極性得点」として利用した。抽出された5成分(英語読み書き不安, 発音への評価懸念, 注目への不安, 発話活動内の先取り不安, 抵抗感)と「積極性得点」を観測変数とし、分散構造分析によるモデル検討を行った。最終モデル($\chi^2=5.148$ ($df=n.s.$), $GFI=.983$, $AGFI=.949$, $RMSEA=.000$)を図1に示す。

考察

「英語読み書き不安」、「発音への評価懸念」という【英語運用能力不足の認知】が、「注目への不安」、「発話活動内の先取り不安」という【対人的評価懸念】に影響し、英語使用の積極性を抑制する【抵抗感】につながるモデルが示された。WTCモデルと比較すると、このモデルは第4層の「第二言語の使用に対する自信」から第1層の「第二言語の使用」までのWTCモデルの流れを汲み、外国語不安の一種である英語授業内の不安と、学校教育過程で形成される発音の不安が、WTCモデルに内包される関係が想定される。

しかし「注目への不安」のような、複数人からの注目に関連した概念は、MacIntyre et al. (1998) のWTCモデルには見られない。発表行動などの注目状況は、第4層と第3層を仲介するような概念になり、WTCモデルの精緻化の可能性が示唆されたといえる。そして「発音への評価懸念」のような音声的な側面が「英語読み書き不安」以上に、発話活動での不安や、発話行動の積極性に影響することがモデルによって示された。発音への効力感を向上させ、不安を軽減させるような課題を設定することで、「発音への評価懸念」が低下し、英語発話行動に対する積極性が向上すると考えられる。このことから今後の研究では、最終モデルを元にした実証研究を行うことが求められる。

文献

Horwitz, E. K., Horwitz, M. B. & Cope, J. (1986). Foreign language classroom anxiety. *Modern Language Journal*, 70, 125-132.

磯田貴道 (2008). 英語スピーキング抵抗感尺度の作成, 広島外国語研究, 11, 41-49.

近藤真治・楊瑛玲 (2003). 大学生を対象とした英語授業不安尺度の作成とその検討, *JALT Journal*, 25 (2), 187-196.

MacIntyre, P. D., Dörnyei, Z., Clément, R., & Noels, K. A. (1998). Conceptualizing Willingness to Communicate in L2: A Situational Model of L2 Confidence and Affiliation, *The modern language Journal*, 82 (4), 545-562.

図1.説明モデル